

# 里地通信 9・10月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋YKビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内  
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

(財)イオングループ環境財団 里山保全活動

## 里地たんけん学校に参加しよう！ - 里山の智恵と技を学ぶ総合的な学習 - 山形県最上町

### 夏休みの不思議な授業

夏休みに入ったばかりの7月22日(土)～23日(日)、山形県最上郡最上町中満沢の満沢小学校周辺を舞台に、里地たんけん学校がありました。

今回の活動の主役は子どもたち。子どもたちが地元学を体験しました。

今、学校では、総合的な学習の時間がはじまろうとしていて、国語や算数、理科などの教科にとらわれず、地域や環境などの学習を行うことになっています。

里地たんけん学校は、学校と子どもたち、地域と親や大人たちが、自分たちが住んでいる里地・里山を歩き、触れ、食べ、遊び、語り合いながら、生活文化を学び、伝えていくために行われました。

このプログラムは、そのまま総合的な学習にやくだてることができます。そして、子どもからおとしよりまでみんなが参加して、自分たちの地域にくわしくなることができます。みんながくわしくなりながら、人のつながりができて、いつまでも自然が豊かで、楽しく暮らせる地域づくりができるき



っかけになると思います。

### ぼくらは里地たんけん隊

里地たんけん学校に参加した子どもたちは15人。満沢小学校の校長先生や教頭先生をはじめ満沢の大人の人や里地ネットワークのスタッフ、取材陣を入れた大人達が50人ほどいます。

子どもたちは、満沢小の「みつざわ」から「み」組、「つ」組、「ざ」組、「わ」組の4つの班に分かれ、そこにそれぞれ2～3人の大人がくわりました。

齋藤正校長先生からお話を聞いたあと、さっそく色鉛筆と地図が各班にわたされます。

「川や水が流れているところを色鉛筆でなぞってください」「田んぼや畑、自然の森なども色鉛筆でぬっていき

さい」

と言われて、それぞれの地図が広げられ、みんなが手を伸ばして色をぬりはじめます。

大人が、「ここ川だよ」と言うと、子ども隊員が

「ちがうよ、家がここで、学校がこっち。だから、ここは川じゃないよ」と、大人も子どもも自分たちが毎日歩いている場所を思い出しながら、地図に水の流れなどを書いていきます。

地元学で基本になる「水のゆくえ」「水の経路図」をつくるための作業です。

思い出せるところの色分けができたところで、いよいよ外に出発です。

## お父さんも昔は子どもだった

最上町の満沢地区は、山あい田畑が広がる美しい里地です。

あちこちに水が湧き、川に注いでいます。車が通る舗装された道のわきからも水が湧いています。水が湧いているお家では、自分の家で使うだけでなく、道のわきにホースや大きなバケツ、ひしゃくやコップをおいて通りすがりの人が水を飲んだり、ちょっとした洗いものもできるようにしています。

冷たくておいしい水です。

さらに、満沢小がある最上町にはあちこちに温泉が湧いています。

満沢小学校の近くにも温泉が湧いていて、そのお湯をひいている場所は「ゆざ」と呼ばれています。ぬるいお湯ですが、洗濯や大根などの野菜洗いなどに使われています。

さて、外に出た里地たんけん隊は、作ったばかりの地図と資源カード、カメラを持って、道を歩き、田んぼのわき道をどんどん山の方へ上っていきました。

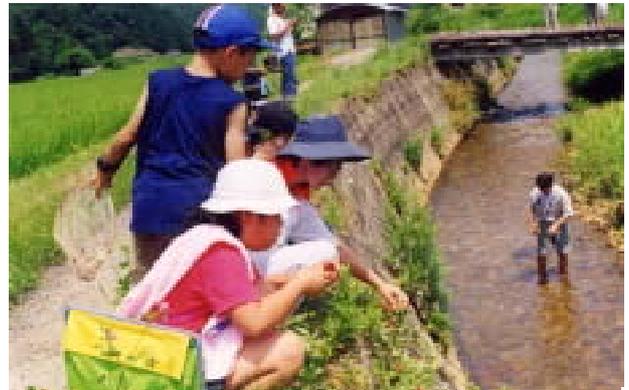
たどりついたのは、満沢にたくさんある水源のひとつです。

ちょろちょろと冷たくてきれいな水が湧いてきて小さな泉になっていました。

泉は透き通っていて、とてもきれいです。

ここで4つの班は地図を取り出し、自分たちの場所を確認してから、班ごとに分かれ、「あるもの探し」をはじめました。

さきほどの「水の経路図」地図と資源カードに、自分たちがみつけたもの、気が付いたこと、教わったこと、びっくりしたこと、知っていること、分からないこと、知らないものを書きとめて、写真をとっていきます。



知っていることは、どんどん書いていきます。知らないことは、あとからいろんな人に聞くことにします。

水が湧いているところには、ワナがしかけてありました。校長先生が足で「あぶないから」とよけようとしたら、ワナがとじて足がはさまれそうになりました。「つかまる場所だった」と、校長先生もびっくりしています。

ワラビが生えていたり、お米を作らなくなった減反の田んぼがあって、草ぼうぼうになっていたり、山道にとつぜん子ウサギが姿を見せたので、みんなで追いかけて、素手でつかまえて、やわらかい毛並みをさわったりしました。

校長先生は、いろんな植物の名前を知っていて、とっても苦いヒキオコシという草や、薬になる草などを教えてくれました。教頭先生は、植物図鑑を片手にいろんな植物を見ては、「図鑑の写真と同じ」と喜んでいましたが、ワラビを見つけたら、とたんにワラビ取りに夢中になっていました。

川のためとでは、ナワシロイチゴが赤い実をつけていて、食べると甘酸っぱくておいしかったです。

たんけん隊についてきていたお父さんは、川にじゃぶじゃぶと入って、魚のつかまえ方や、川のいきもの、遊び方を教えてくれました。

「お父さんが子どものころ、ここで、こうやって遊んだんだ」って、いつものお父さんとちがって、子どものように楽しそうでした。

へとへとになって戻ってきたら、お母さんたちやおばあさんたち、残っていたおじさんたちがたくさんそうめんをゆでて待っていてくれました。

満沢の冷たいわき水で冷やしたそうめんはとってもおいしかったです。



### おじさん おばあさんなら知っている

学校に戻って、忘れないうちに、地図や資源カードを書きます。写真は2日目にできるそうなので、1日目はそれでおしまいになりました。

2日目には写真ができていました。各班ごとにできた写真をみんなで見たあとは、「動物」「植物」「たてもの」「食べもの」というように題を決めて、写真を並べ直します。そうして、資源カードをみながら、班ごとに写真を分け、資源カードに張り付けて、資源カードをつくります。

でも、写真を貼っただけで、よく分からない植物や、たてもの、道具などがありました。

学校の校庭では、おじさん、おばあさんが、暑いなかで、楽しそうにゲートボールで遊んでいます。「おじさん、おばあさんならきっと知っているはずだ」

みんなで資源カードをもって、おじさん、おばあさんに聞きに行きました。

さすが、満沢ですと暮らしてきた人たちです。



分からなくて、白紙だった資源カードが次々に埋まっています。

ついでに、おじさんは、生まれも育ちも満沢の人が多いのに、おばあさんは、よその地区で生まれて、育ち、結婚してから満沢に来た人が多いということも分かりました。

最後に、いろんなことを教えてもらったおじさん、おばあさんにも学校に上がってもらい、班ごとに発表会をしました。

これで、里地たんけん学校は終わりにになりました。

でも、新しい遊びや、満沢のことを知ることができました。

おじさん、おばあさんや、大人の人も楽しそうでした。

おじさん、おばあさんも、学校の子どもたちといっしょにいろんなことをしたいと言いました。

これから、大人たちもいっしょに別の場所の資源カードをつくったり、地図を完成させたら、もっともっとおもしろい満沢になると思います。

寄稿

# 本校の「ふるさと学習」

山形県最上町立満沢小学校  
齋藤正昭

## 1 はじめに

本校は、児童数27名、教職員数9名のへき地2級指定の小規模校である。最上町の中心地、向町から南へおよそ5kmの距離に位置し、小国川支流の満沢川に隣接した河岸段丘にあり、周りを水田と山に囲まれた豊かな自然に恵まれた地域である。しかし、日常の生活の中では、生き物に触れたり野山に出掛けたりする児童が少なくなってきたおり、豊かな自然環境を楽しむ機会も少なくなってきた。

その実態を受けて、本校では昨年度から地域素材を生かした総合的な学習に取り組んできた。その成果として、満沢の豊かな自然に気づく心や、自分のこだわりを大切に課題を追求していく態度が育ってきている。

更に、自分からより積極的に自然と触れ合おうとする態度や、課題に対してより粘り強く追求していこうとする態度を育てていくことが望まれことから、今年度はより充実した学習活動を展開できるように研究を進めている。

このような時期に、本校の教育振興会長であり、「最上の荘」の実践家でもある菅博氏と里地ネットワークの主催で、「里地たんけん学校」をしたいとの申し出があり、本校の「ふるさと学習」のねらいと合致するところがあり、教師・児童とも学ぶべきところが多いと考え、全面的に参加協力することにした。

## 2 研究主題

学ぶ楽しさを知り、いきいきと活動する子供の育成  
～地域素材を生かしたふるさとタイムの取り組みを通して～

## 3 「ふるさと学習」のキーワード

本校の「ふるさと学習」は、ふるさとのよさを子供たちが体験を通して実感してほしいという願いを込めて掲げたのが次の4つの「郷」である。このキーワードを「里地たんけん学校」の活動に結びつけてより具体的な意味づけができた。

ち きょう 知郷	ふるさとを知る	里山と満沢のくらしを知る。
ゆう きょう 遊郷	ふるさとに遊ぶ	沢遊びと虫とり、野菜と山菜取りを楽しむ
しん きょう 親郷	ふるさとに親しむ	おじいさん、おばあさんから昔の話を聞く
り きょう 利郷	ふるさとを利用する	満沢の知恵と技を人づくりものづくりに生かす。(働きかける)

## 4 「ふるさと学習」の進め方

### (1) 発達段階に応じた課題設定と課題解決

児童は、昨年度同様個別またはグループで課題を設定して取り組むが、発達段階に応じて、低 中 高へと学習の深まりが見られるよう、視点を明らかにしていく。

課題や課題解決能力について、下記のような視点を設けて、今年度できる範囲でチャレンジしていく。

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
課 題 選 択	生活科と単元と合わせて栽培活動に取り組む。 (生活科年間指導計画の作成)	地区の自然について、自分の調べてみたいテーマを見つけ、自由に追求する。	対象に対する自分なりのかかわり方を大切にしながらこだわりをもって追求することができる。
課 題 解 決	発見したり、選択したりしながらかかわりたい対象を見つけ、活動に浸ることができる。	対象に対する自分なりのかかわり方を大切にしながらこだわりをもって追求することができる。	目的に応じて、対象に対するかかわり方を変えながら、こだわりをもって追求することができる。

## (2) 地域素材を生かす

- ・栽培活動、生き物、草花、川、土、水など観点を絞って身近な自然を見つめさせることにより、児童が豊かな自然環境に気づけるように配慮していく。
- ・テーマを見つける範囲を、学年に応じてとらえやすいように工夫することで、より主体的に地域素材と関われるように工夫していく。(低学年は学級菜園や一人一坪栽培の畑、中学年は身近な生き物、高学年は地域の自然)
- ・学校行事や全校活動の中で、近くの野山に出かけ、共に楽しむ活動を積極的に仕組んでいくことで、自然を楽しむ気持ちを育てていく。

## (3) 環境整備

- ・学校の中でも地域の自然のよさが生きるように環境を整備していく。  
(学級菜園、学校花壇、魚の水槽・飼育池、満沢の野山の草花の展示や写真の掲示など)

## (4) 人材の活用

- ・「ふるさと先生」として地域の方々から授業に参加していただく。
- ・「ふるさと学習発表会」(11月に予定)に地域の方々を招待して、児童の学習の成果を地域全体に広めていく。

## (5) 個人を生かしたテーマの見つけ方の工夫

- ・地域巡りや体験学習を重視する。
- ・ウェビングなどで、児童自身がテーマをとらえやすいように工夫する。

## (6) T・Tでの授業態勢

- ・生活科は1年・2年の両担任によるT・Tの授業を行うことができるが、3・4年、5・6年の複式学級では一人の担任では、多様な学習活動に対応ができない。このことを解決するために、「ふるさとタイム」の時間設定を工夫し、全職員によるT・T態勢ができるように時間割を工夫する。
- ・少人数であることのよさを生かし、児童一人一人の研究について全職員で検討し、支援ができるように研修を深める。

## (7) 評価の工夫

- ・総合的な学習と生活科の掲示コーナーを設け、作品・観察メモ・写真・実物などを常時掲示し、研究の流れが見えるようにする。
- ・各ブロックの実態に応じて、自己評価・外的評価の両面から、客観的な資料となるような方法を工夫する。
- ・「ふるさと学習発表会」での発表のほかにも、地域に広く知らせ、地域の方々からも感想が寄せられるように工夫する。(新聞や手紙など)

(8) 学習展開の工夫

「ふるさと学習」4つのステージ

ふれるステージ	低学年	中学年)	高学年
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     みたりきいたりして、 いろいろなことにふれよう                 </div>	見 る 聞 く 触 れる 遊 ぶ	体験活動 ゲストの講演・実演 学び方の共通理解 視聴覚ソフトの活用	
つかむステージ			
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     つづけて調べる計画を たてよう                 </div>	計 画	課題の選定 学習計画	
調べるステージ	裁 培		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     さいごまでがんばろう チャレンジしよう                 </div>	観 察	見学, 栽培・飼育 採集, 聞き取り 継続観察	実験・実習 調査, 観察, 観測 コンピュータ活用
まとめるステージ	見 学 (自分の発見を生か し, 活動に浸る)	(自分なりの関わり方を大 切に)	(目的に応じて, 対象への 関わり方を考えて)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     わかったことをまとめよう 伝えよう                 </div>	お手紙 劇, ごっこ活動 紙芝居など	コンピュータ活用(プレゼンテーション, 作品製作 メール), PR活動 劇, 紙芝居 TP・OHP, VTR など	

5 里地たんけん学校

- (1) 期 日 7月22日(土)~23日(日)
- (2) 参加者 児童 15名(満沢小学校児童に宮城県・町内の児童も加わる)  
地元の父兄・祖父母 約10名(探検の補助、食事の準備)  
里地ネットワークのスタッフ 6名
- (3) 会 場 満沢小学校旧校舎と中満沢地区
- (4) スケジュールと活動内容

7月22日

- ・ 9:00 開校式(旧校舎)
- ・ 9:20 オリエンテーション(探検地図づくりの説明など)
- ・ 10:00 里地探検 ...水源を探す、植物・生き物を探して採集やメモをする。
- ・ 12:00 昼食
- ・ 13:00 里地探検 ...集落のあるもの(神社など)探し田んぼ・畑・草地の現況調査
- ・ 14:00 地図作り...土地の利用による色分け、水の経路などの作業
- ・ 15:00 解散

7月23日

- ・ 9:00 資源カード作り...フィールドワークで撮った写真をカードに貼って、写真の説明を書く
- ・ 11:00 今までの探検で疑問に思ったことをおじいさん・おばあさんに聞く。  
(家庭を訪ねる。ゲートボール中に訪ねる。)
- ・ 12:00 昼 食
- ・ 13:00 まとめ 報告会 ゲートボール中のおじいさんおばあさんも報告会に参加

## 6 里地たんけん学校から学んだもの

毎日この地域で生活している子供たちでも、たくさんの発見や学ぶことの多い2日間だったと思う。本校の「ふるさと学習」に生かしていきたいことをあげると、

- (1) 観察・調査活動には、必要に応じて時間を十分に保証してやる。
- (2) 今回学んだ記録やまとめの方法を生かす。（地図作り、地域資源カードなど）
- (3) 今回作成した地図に現在進めている個人研究のデータを付け加えたり、他の場所でのフィールドワークをして、「満沢地域マップ」にしていく。
- (4) 教師の支援態勢の仕方をさらに具体的に構築していく。

## 7 おわりに

この企画は、2002年度の新教育課程完全実施を目前にして各学校で試行している「総合的な学習」の現地研修ともなると考え、町内外の学校の先生方にも案内を差し上げたが、あいにく授業参観日や県中体連の大会と重なってしまい、外部からの参加者が得られなかったのが残念である。

本校の教師・児童にとっては、またとない研修や体験の機会を与えていただいたことに感謝を申し上げます。



はりきっていた斎藤校長先生

資料1 児童の作文から

5年 佐藤 亜由美

私が、里地体験で一番楽しかったのは、なんといっても、野うさぎをつかまえたことです。初めは、ねずみかもぐらだと思ったけど、のう道に出てきたら、うさぎだったのでびっくりしました。教頭先生が先回りして、道をふさいで、横ににげたのを私がつかまえました。野うさぎを見たら、みんな

「かわいい。」

といって、続々に手をのばして野うさぎをさわっていました。にがしてやると、「早くここからにげよう。」というように、走り去っていきました。



それと、一番心に残ったことは、ゲートボールをしていたおじいさん、おばあさんに昔のあそびや、遊び場所などをたくさん聞いたことです。おじいさん達は、道路や、山の中で、こま回しやちゃんばらごっこ、かくれんぼ等をして遊んだそうです。夏は、川で魚とりもしたんだそうです。一方おばあさん達は、満沢におよめに来た人がほとんどだったので、おばあさん達は分かりませんでした。

身近で見る物をもっとよく見るといいことがあるんだなあと、この体験をして思いました。

5年 菅 美紀

私は、亜由美ちゃんと、旧校舎の中に入った。「ひさしぶりだな」と思った。ちょっとがらんとしていた。

すると、東京の人が来た。「おはようございます」！！とあいさつをした。そのあとにつれて、真奈美ちゃんたちも次々に来た。

まずは、中満沢に行き、うさぎのわなや、いろいろな花を見つけた。そのあと、のうさぎも見た。

次の日、上満沢の方に行った。のどがからからになったけど、すずしい風がそよそよふいてきて、きもちよかった。

東京の人と二人で、おいなりさまのことを、岸一正さんにききにいった。すると、きつねは、けらいのような、ことをやっていた。私がいんしょうにのこったのは、おいなり様のことでおまつりなどがあることなどがわからなかったけど、話をきいたら勉強になった。本当に心にのこった二日間だった。

5年 菅 真奈美

私が、里地体験で一番心にのこったことは、私の田んぼの近くの山にいったことだ。班は、満沢の「み」組だ。いっしょに行く東京から来た人の名前は「タッキー」だ。さっそく山に行くと、ねじ花やあざみなどが咲いていた。また少しいくとうさぎのしかけがあった。私は「こんな所にうさぎのしかけがあったなんて、思わなかった。」と私は言った。その時川がながれていたので、地図に印を置いて、大也くんたちが、魚とりをしていたので、私たちも行ってみた。

「あ、大きいかえるがいる」

それをつかまえようと思ったけど、つかまえられなかった。それに、水かまきりや小さな魚やどじょうなどがいた。ひろき君のお父さんがいっぱい魚をとってくれた。その時、

「うさぎー」

と聞こえた。みんなは、いっせいに声のある所に行った。その時、はじめはうさぎなんていないだろうな、と思っていたら、亜由美ちゃんがうさぎをだいてた。私は、びっくりして、うさぎをさわった。

とても楽しかったし、いろいろな物、動物、花が見られてよかった。

**（財）イオングループ環境財団 里山保全活動**

**西和賀の里の生活たんけん隊に参加しよう！  
- 地元学実践による「地域資源マップづくり」 -  
岩手県沢内村**

岩手県西和賀郡沢内村。  
 岩手県と秋田県の県境に近い、深い山々に囲まれた里地。  
 かつては近隣に鉱山があり、隣村には温泉が湧いている。  
 雪が運び、山にいだかれた沢水がとうとうと流れる水の里。  
 ゆるやかな棚田が広がり、山にはイワナがひそみ、山菜が食卓を彩る。  
 四季の美しさに惹かれ、都会に住む人が、沢内村に移り住んだ。  
 この土地がどんなにすばらしいか。  
 その想いを伝える言葉が見つからないもどかしさ。  
 ならば、ヨソモノの目と、ウチの目を合わせてみよう。  
 そこに浮かび上がる村の暮らし、自然。  
 語ることが、語り合うことがつきない。



**地元学実践！沢内村**

今回の里山保全活動のテーマは、「地元学」です。  
 主催は、西和賀文化遺産伝承協会、（財）イオングループ環境財団、里地ネットワーク。もともと都会に住んでいて、仕事がきっかけで沢内村を知り、その四季の美しさ、自然と生活の結びつきや文化に惚れ込み、やがて沢内村に移り住んだ広瀬龍一さんは、西和賀文化遺産伝承協会を設立しました。沢内村の自然と暮らしのすばらしさを、そこに住んでいる人たちにも、外の人にも伝えたい。そのための活動がしたい。そんな想いがありました。

そして、里地ネットワークと出会い、地元学と出会いました。

そこに暮らしている人々にとって、どんなにすばらしい自然や生活スタイルであっても、それが日常である限りにおいては、「日常」のおもしろさ、他とは違う「その土地、その人、その暮らしならではの」こと

を実感することが非常に難しくなります。また、そのおもしろさ、すばらしさを外から来た人の言葉で伝えるだけでは、やはり、実感として伝わることはありません。

地元学のおもしろさは、「ヨソモノ」の目と「ウチ」に住む人の目を合わせることにあります。「ヨソモノ」がヨソモノであるがゆえに、そこに暮らす人にとってはなんでもないことで驚く。ヨソモノならではの知恵や知識で、その土地のおもしろさ、「ならではの」に気づきます。「ウチ」の人が、あたりまえのこととしてとらえていることも、実は、同じ「ウチ」の人であっても、隣の人とは違ったりします。

「ヨソモノ」の視点があることで、「ウチ」の人たちも、自分たちの生活や自然について再発見し、驚き、学び、知ることができます。それが地元学です。

ヨソモノにとっては、楽しく、わくわくして、知的な好奇心を満たし、心が癒される体験になります。地



元学の実践はそのままグリーンツーリズムと言ってもいいかも知れません。

今回の沢内村での地元学は、沢内村の教育委員会、岩手県の振興局、岩手大学の研究室などが協力し、地元の方々や岩手大学の学生、県職員ら総勢70名が参加しました。

## 雨でもやります。地元学

2日間、みっちり地元学で沢内村をたんけんしようとして準備万端。ところが、あいにくの雨となってしまいました。

まずは室内で、水の経路図をつくります。地図を広げ、川や水路、水道、下水道、農業用水、排水、水源、せき、田畑、自然林などに印を付けていきます。

そのあと、水の経路図の地図と、資源カードを手に、地元の人、ヨソモノの混成チームで各水系ごとに分かかれ、村の中を歩き回って、「あるもの探し」をします。

動植物、山野草、農業、川、水、暮らしの道具、地の神様など、あらゆることを、気がつく限り調べていきます。しかし、外は雨。

そこで、各班ごと車を出してできる限りの調査をすることにしました。

班は、11に分かれ、それぞれ、5人から8人程度です。地元の人、学生、様々な経歴をもった大人達が雨の中を、田畑、家の納屋、水源、山際に行って写真を撮り、資源カードを埋めていきました。

11の組が、それぞれ、20枚以上の写真を撮り、20枚以上の資源カードを書き入れます。

単純にたった1日、2時間程度の「あるもの探し」で、200枚をはるかに超える資源カードができあがりました。

2日目にそのカードをすべて床に並べると、それは壮観ななごめです。

最初は、「この村にはそんなにたいしたものはないよ」と言っていた地元の人も、資源カードの写真やコメントを見ながら、うなずいたり、「知らなかった」と声を上げたり、「これはこういう意味もあるよ」と付け加えたり、会話が盛り上がりました。

## マムシ、かやぶき、キノコのおい

さて、どんな「あるもの探し」があったのでしょうか。2、3例を挙げてみましょう。

ある班が雨の中を歩いていたら、草むらからマムシが姿を見せました。驚くヨソモノ達を尻目に、ゆっくりと歩いてきた案内人のお年寄りが突然顔を輝かせ、さっとマムシをつかまえると、手元の道具で皮をはぎ、腹を割き、肝を飲み込んで、剥いた身を「焼いて食べるとおいしい」と、ポリ袋に入れて渡してくれました。

そのすばやさに、一同あっけにとられてしまいました。「マムシ取りの名人」が資源カードに記録されました。

マムシの身は、その夜の交流会で、宿泊所となった古民家の囲炉裏であぶり、塩をふってヨソモノたちの腹におさまりました。

ところで、この古民家、今は数少ないかやぶき屋根です。かつて、この村には茅場(かやば)が多くあり、毎年カヤを刈っては、雪よけや屋根材として使ってきました。かやぶきの屋根は数十年持ちますが、囲炉裏で火を炊き、すすを出して内側から乾燥させることで耐久性が増します。宿泊所となった古民家は日常的に人が住んでいないためトタンの上にカヤを乗せた形で維持しています。また、茅場も、昭和40年代以降、刈る人がいなくなったため、今では柳などの木が生え、草むらとなってしまい、カヤもなくなってしまいました。今回の調査ではいたるところに、かつて茅場だったところが記録され、カヤがわずか30年ほど前までは人々の生活に欠かせなかったことを裏付けています。

沢内村では、数戸残った古民家の活用を考えていますが、茅場の再生も含めた検討が必要です。

この他にも、家の神様が田んぼにあり、桜とともに石が奉られています。実はそれが本当の墓で、明治時代の頃までは田んぼの端に埋葬されていたり、東北



地方でよく食べられる野草のミズが、この地方では茎だけでなく、年に1度、葉につくむかごのような「実」も食べていたこと、かつては里芋を塩漬けにして保存食にしていたことなど、次々に沢内村ならではの生活文化が出てきました。

村の中心から田畑を抜けて山に入れば、沢にはミズが生え、イワナが時折すうっと沢を横切り、サルナシが木の上に実を付けています。案内していた地元の方は突然鼻をひくひくさせてあたりを見回し、「キノコがある」と言って、草をかきわけ、ヒトヨダケと呼ばれる食べられるキノコを見つけだしました。森のすがすがしいにおいはしていましたが、ヨソモノも地元の人も分からなかったにおいを、山仕事が好きな案内人

はかぎわけたのです。「山にはいろんなにおいがあるからね」と案内人。まだまだ奥が深い沢内村の人々です。

### これからがおもしろい

完成した水の経路図と200枚を超える資源カードは、沢内村の人にまとめて渡しました。

これを元に、地元では、子ども達や大人達も交えて、みんなでカードを見ては、新たな資源カードを作り、沢内村に何があるのか、沢内村ならではのものや、人や、自然を発見しようということが、計画されています。

地元学は、資源カードをつくることが目的ではありません。資源カードから見えてくるものをどう活かすか、活かしてこそ地元学です。

今回の地域資源マップづくりを通して、沢内村のよさを再発見し、「知らないこと」が地元学をやるう、そんな意欲の言葉が沢内村の参加者から聞こえてきました。

特に、今回、参加者への食事の準備で外へ出ることができなかった女性達からも、「今度は自分たちも出てやろう」という言葉が出ていました。

沢内村の地元学は、これからが本番です。

## （財）イオングループ環境財団 里山保全活動

### 有機農園おやじの村～北海道白滝村

「食べる人々が創る農業」は、大規模単一型の農業から、自分たちが食べるものを自分で栽培していこうという暮らし方をめざす取り組みです。家畜を飼い、肉や卵をいただき、堆肥をつくり、作物を育てていく。人々にとっても、自然にとってもやさしい農業です。作る人も食べる人も一緒になって、現在新たに母屋と農場の整備を行っています。8月6日～13日の1週間、有機農園おやじの村の農業経営の体験と、新たに建設している農園の水確保のため沢からパイプラインの敷設、作業小屋の建設を行いました。

白滝村の里地での楽しみとしては、どさんこ馬による森林・小川越えのホーストレッキング。それから有機栽培されたもぎたての「とうきび」は、茹でて皮ごと炭火で焼いてもとても甘く美味でした。

#### 北海道白滝村

明治45年に開拓の鍬が入れられた白滝村は、北大雪の高原の村です。森林を伐り開き、土地を耕し、水を求め、大自然の中での人の営みを築いてきました。



気温の日較差が大きいことからでんぶん質の高いおいしいジャガイモの産地となりました。この地では農業の大規模化が進められ、国内農業の中でも一人当たりの耕地面積が大きい農業を実践する村となりました。しかし、大規模化により単一化してしまった農業や農家経営により、自然災害や外国産輸入農産物の影響を受けるなどのもろさもあります。

### 有機農園おやじの村

「有機農園おやじの村」のご主人・渡辺信吾さんは、農業の大規模化政策の中、大型機械の販売をするパリの営業マンでした。しかし農家の大規模経営化が進んでいく過程で、多くの農家が多額の負債のために破産・離農していく姿を目の当たりにして、自然と共生した小規模で多様性のある農業に地域での営みの方法を見出し、農園を開設しました。農林漁業体験民宿の第1号ともなり、自然に近い状態で、どさんこ馬、ニワトリ、豚、アヒルなどを飼い、農作物は、栽培可能なあらゆる作物の栽培を心がける自給自足的な農業を楽しんでいます。豚やニワトリは1年ほどの飼育の後、加工業者にソーセージやハムにしてもらい、地域の人々や都会の消費者の人々と分かち合っています。

### 「食べる人々が創る農業」

自然や自然と共生した農業が「癒し」や「教育的な効果」があるという実践例があります。森林内に今新たに建設中の農園は、農地の開墾は豚の放牧による「鼻力」で開墾し、水は近くの湧水からパイプラインで導く予定です。施設をつくりながらじっくりと農場を築いていく予定で、直接農場を訪問して農場づくりや農業体験をするばかりでなく、消費者としての関わりなど誰でもどんな形でも参加できる農場づくりをめざし

ています。

### 渡辺信吾さん手記

定年まであと3年を残してやっとサラリーマンを脱出、百姓入門しました。

人は「どうしてこんな村に来たのですか」と聞きます。

「人間が少ない村ですから」まずこう答えるのですが、ますますいぶかるばかりですので「この村は戦後農政の落し子みたいなものですから」とちょっと気張って付け加えています。

戦後の混乱期も落ち着き、電気製品三種の神器もほぼ各家庭にそろった昭和30年代の始めにトラクターのセールスマンとなり30余年間、よくもまあ売ったものだと思いますが、ちょうどこの期間が北海道農業の一大変貌期となり、私はいわばその仕掛人に組み込まれてこの時代を過ごしたわけです。そして今住むことになったこの村は、この地方では最も早くトラクターが入りました。当時は30馬力級でも大型の部類、相当高価な財産ですから夜通しの賃耕作などを重ねて償還に苦勞をしたと当時の息子たち。今は立派な経営者になった村のリーダーの一人は私にそう語りました。そして今、農家数約60戸、100ヘクタール級の農業法人6グループ、かつて先人達が開拓の鋤を振るいながらも夢半ばにして去った標高500mの高原は、彼ら若人らが大型機械を駆使してみごとに開墾、本村を代表する一大耕地がそこに拓けています。

さて農村は近代化の掛け声とともにいろいろな政策が打ち出され、いわく、都会のサラリーマンと同等の報酬が得られる、生活レベルが向上する、重労働から開放されるなどと宣伝されて、若人たちも発奮し大型化は進み、トラクターは1戸に2台、3台、さらに乗用車、トラックは当り前の時代になりました。

わが村はそのままに実現したような農村です。近代化政策は本当に農民を幸せにしたのでしょうか。なるほど私がトラクターを売り始めた頃の生活風景に比べれば一段と恵まれたように思えます。しかし平均4千余万円の負債とはどういうことでしょうか。彼らの勤勉な働きぶりは驚異的です。それなのに負債はむしろ増えていくというのです。農業近代化はすっかり色あせてしまいました。(後略)

<酪農学園大学「くらしのサイエンス No.18」(1995)より>

## 寄稿

## 小菅の里知る区ロード探検隊2000

小菅むらづくり委員会(長野県飯山市)

## 第2回夏の探検隊

## 蜂の先制パンチを食らう

夏の探検隊は、一泊二日。北竜湖畔の森で秘密基地造りをしてキャンプ、翌日は小菅山へトレッキングという計画です。7月29日、朝の受付に顔を出したのは戸狩小と東小の3年生組。石森俊勝くんも、春に続いての参加です。戸狩小3年担任の笠原あやさん、「秘密基地造りが楽しみで、参加しました」と、開会式の中で抱負を語ります。

主催者側は何かと用事が重なり、真島委員長、育成会の鈴木さんがそれぞれ法要で日中不在、翌朝6時から小菅区の水路普請があたりで、大変です。野外生活のプロである鈴木さんがいなくては、奥山での生活術講義「危険回避と仙人の食材」も急きょ取りやめに。

さて、全員受付を済ませて隊員カードを胸に、イザ出陣です。まずはキャンプ場の草刈りをし、テントを立てましようとして取りかかった途端、「大志くん、蜂に刺されちゃった」

との小林くんの声。左足のすねを見てみると、虫に食われたような赤い跡があります。あたりを調べると、草むらの中にヌカバチの姿を確認しました。不法侵入への先制パンチというところでしょうか。でも、ひるんではいられません。すかさず、やまぼうし自然学校の杉山さんが毒を吸い出し、応急手当を行います。大事には至らず、まずは一安心といったところです。

翌日、諏訪生れの笠原先生、別の場所で見つけた蜂の巣の中から幼虫を引っ張り出して、昨日の仕打ちとばかりに飲み込んでみせ、日頃悪たれを突く子供たちに

「どんなもんだい」

といったところを見せました。村松くんに小林くん、



蜂の巣と先生の口元を交互に見比べながら、言葉が口から出てきません。

## 木を切ることが面白い

予定では、午前中から森の秘密基地造りに取り掛かるつもりが、テントを立てるのに11人で午前中いっぱいしかかってしまいました。それぞれ持参したお握りなどをいただき、

「4時ごろからなどという、午後の仕事にしておかないでよかったね」

と、思わず感想が口を突いて出ます。

秘密基地の現場は春先、イオングループ環境財団の事業「小菅の里プロジェクト」で整備した、松に雑木が混じる北竜湖を望む森の中。小屋のタイプはティーピーというインディアンタイプ(道祖神火祭りに作るようなもの)に決め、2班に分けました。戸狩小組と東小組です。

5メートルぐらいの雑木5~6本を先端で縛り、円錐形に裾を広げて、周囲を木の枝や葉っぱ、ススキで覆えば完成。まずは、のこぎりを使った木の切り方からです。

「倒す方を決めて、そちらにVの字型に切れ込みを入れます。次に、反対側からゆっくりと切っていきます」

宮崎さんが説明します。山岸くんに加藤くん、石森くん、のこぎりを握り締めて、頭の中はすでに木を切るほうへ移っているようです。説明を受けるのももどかしく、すぐさま木を切り始めました。自分の身長は何倍もある木を倒すのが、とても面白いようです。

「木を切り倒すのはもういいから、その辺に切っている木の枝や葉っぱを持っておいで」

と言って小屋組みを進めていたら、下の方で加藤くん、まだ木を切っています。

「もういいよ、航平くん」

と見たら、すでに半分以上切れています。

「その木は、春切らずに残しておいたホウの木だよ。アアア」

てなわけで、小屋造りが進みます。道祖神づくりの心得のある市川さんに鷺尾さんの作業を見ながら、宮崎さんも

「なるほどね、ふんぶん、そうか」

こつさえつかめば、楽な作業です。

「そこ踏んじゃだめだよ、石森くん。春、きのこを植えた木の有るところじゃないか」

山岸くんに加藤くんは、まだのこぎりを使っています。ほとんど完成したところで上部の敵情視察に赴きました。戸狩小組のは周囲の林によく溶け込んでいて、まさに秘密の基地風です。小林くん、村松くん、笠原さんの三人、西陽を右側から受けてなんだか得意顔です。

「じゃー、この前で、みんなで記念写真だ」

と振り返ると、東小の二人は完成した基地の隣で、切り刻んだ木を使ってまだミニチュアの小屋を作っています。小屋そのものを造ることよりも、木を切ることのほうが面白いようです。

## 桂の木は倒れた

山の木々も、精一杯生きています。ここで、そんな話を一つ。

7月半ば、朝7時ごろ、お宮の桂の木が大きな音を立てて倒れました。幸い、そばに人はいなかったため、大きな事故にはなりません。その桂の枝には、種がびっしりとついていました。普段は見られないものであり、数珠をまとっているようにも見えました。

死期を悟り、少しでも多くの子孫を残したいという、必死の姿です。

昨年、この桂の木のすぐそばにあったケヤキの巨木が切り倒されました。お祭りを何とか維持していくための、経費になったらという氏子のねらいからです。お宮には杉の大木はたくさんありますが、広葉樹は桂とケヤキだけでした。神の依り代として、百年も二百年もお互いに支え合ってきた相手が急にいなくなり、桂は心の張りを無くしてしまったのかもしれませんが。

## ホウの木の葉を器に

「そろそろ4時にもなるし、下のキャンプ場へ戻りましょう」

ということで、夕飯の準備です。メニューはドライカレーにピーマン焼き、トマトサラダ。切られてしまったホウの木の葉を集め、食器代わりにすることにしました。

3年生たちは、タマネギをむいて切り、感激にむせて(?)涙を潤ませています。

「タマネギ切った手で目をこすっちゃだめだよ、正和くん」

こらえきれなくなった山岸くんは、包丁を持ったままの手で二~三回、涙を拭いています。余頃さん、レシピを忘れてきてしまったので、一度だけの経験を思い出しながら、料理指導。

「みじん切りのタマネギとニンニクを炒め、塩コショウ、カレー粉をまぶした牛ひき肉を入れてさらに炒めてください。トマトジュース、白ワイン、ローリエ、ナツメグを入れて煮詰めます」

「ピーマンは半分に切ってマヨネーズ、コンビーフ、ハム、パセリを載せ、焼いてください」

「トマトは適当な厚さに切り、チーズとみじん切りのニンニクを交互に並べ、」

この辺から女性の岡田さんや真島委員長も加わり、少しずつ形になっていきます。ご飯は、大鍋で炊きました。鈴木さんの差し入れてくれた様々な非常食用の缶詰も、20分間沸騰した湯の中に入れて、試食にと並べられました。この日の勤務を終えた吉原さんや蒲原さんも同席して、いよいよ夕食会です。

「ホウの葉の器、なかなか様になってるよ」

「味だって、いけてるよ」

焚き火を囲みながら、小菅の里の昔話、仙人の話な

どという計画は、ガヤガヤという隣同士の会話の流れの中で、時間を失ってしまいました。

## 気分は修行僧、 小菅山頂を征服だ

台風の影響のせいか、一晩中風が吹いていました。カラマツの林を吹き抜ける風の音は雨降りのようにも聞こえ、テントの中で心配しましたが、起きてみると雨の心配もなさそうです。6時間近、テントを抜けて出して小菅の水路普請に参加。戻ってくると、朝食の準備が進められています。

焼きそばにたたきキュウリの朝食をホウの葉でいただき、昨日の残りご飯を昼食用のお握りにして、イザ出発です。この日参加の藤沢母子3人を加え、歩くのは12人。片付けは吉原さんなどに任せることにしました。それぞれ麦茶を背中に、標高500メートルの北竜湖から約1,000メートルの小菅山頂まで、標高差500メートルの苦行。みんなで一本ずつ食べてもらおうと塩をふったキュウリが、ずしりと肩にきます。

「これがマタタビ。仙人はこれを食べて、また旅を続けたっていうんだ」

「猫が好きでネ。漢方に使うのは、この凸凹のやつ。虫が入り込んで、こんなかっこうになっちゃったんだ」

杉並木の途切れた、船石でのこと。美恵子さんと緑さんの姉妹、猫への土産にと、この話を聞いて早速マタタビ採りを始めました。

山岸くん、水筒にオレンジジュースを目いっぱい入れ、右に持ち替えたり左肩に掛けたり、フーフー言いながら上ります。自分で飲むものですから、他人に文

句を言うわけにもいきません。小菅神社奥社で一休みした後は、さらに頂上のブナ林目指して歩きます。

「もう少し歩いたら、お昼が待っている」

「枯れ葉のジュータンに寝転べる」

頭の中が空っぽになり、気分は修行僧です。

ブナの木は、風に吹かれて、青い空の中で右に左に揺れていました。ここで昼食。残りご飯でのお握り、キュウリやソーセージだけの昼食でも、なんと美味しいことか。ブナの木の下で飲む麦茶は、また格別です。

少し元気が出てきたところで、大地に仰向けになりました。すーっと、自然の中に溶け込んでいき、言葉を失います。加藤くんは、捻じ曲がったブナの木に上ってみました。少しだけ偉くなったような気分です。みんなで虫を探してみました。余頃さんによると、5万円のクワガタムシがいるかもしれないというんです。

「5万円。5万円」

呪文を唱えながら山頂のブナ林を歩き回りましたが、結局見つかることはありませんでした。虫たちも、台風を避けて隠れていたのかもしれない。

三回目の秋の探検隊は、10月22日(日)に予定しています。小菅の里の歴史と文化に親しむためのオリエンテーリングの計画です。

お問い合わせ等は、  
瑞穂地区活性化センター(TEL:0269-65-2501)  
へお願いします。

(鷲尾恒久記)

## 里地ネットワーク推薦書籍・資料のご案内 アイヌ文化記録映画のご案内

北海道の開拓は、主に大規模単一型農業の道を歩んできました。しかし、先住民であるアイヌの「自然と共生する営み」の中にこそ、人と自然との共生・循環があったのではないのでしょうか。

一昨年の里地セミナーでお世話になった民族文化映像研究所は、「庶民の生活と生活文化」に自然との深いつながり、深い対応があるとして、20年以上にわたり記録映像を制作しています。100を超える作品の中に、アイヌ関連の作品は7つありますので、ご紹介いたします。

民族文化映像研究所の記録映像は、毎週金曜日の夜に行われている「アチックフォーラム」の中で鑑賞することができます。また、フィルムのみならず貸し出しも行っていきます。

### 『シシリムカのほとり』

～アイヌ文化伝承の記録』(1996年)

明治時代以降、アイヌの人々はそれまでの狩猟採集中心の生活から農耕を中心とする生活に変更させられてきた。そのための苦労は並大抵の努力ではなかった。二風谷集落の向かいに広がる河川敷の農地にも二風谷のアイヌの人々の苦闘の歴史があり、そこは生活者にとって重要な生産の場所であった。日高山脈の麓から太平洋に向かって南流する大河が沙流川(アイヌ語名=シシリムカ)である。泉、山菜、農耕、物作り、丸木舟、収穫、川魚、家など営みから、アイヌの伝統文化をトータルに捉えている。

### 『チセアカラ - われらいえをつくる』(1974年)

アイヌの家作りの再現から、アイヌの知恵や自然観をとらえていく記録。

### 『アイヌの丸木舟』(1978年)

アイヌの伝統的生活は、川を軸とした狩猟漁労生活で

あった。そういう生活にとって舟は重要な生活道具であった。山での材にする木の選択から完成した舟が漕ぎ出すまでを記録。



### 『沙流川アイヌ・子どもの遊び』(1978年)

山や川を歩きながら、微妙な自然とのつきあい方を感じとり、遊びの道具作りなどを通じてアイヌの伝統的な生活技術を学びとっていく記録。

### 『沙流川アイヌ・子どもの遊び

- 冬から春へ』(1984年)

遊びは、家の中や家の周辺から、雪解けの山や川辺へと広がっていく。家の中での竹割り遊び、雪が積もるとソリ作り・遊び、木の樹液を集めてアイスキャンデー作り。子どもたちは動植物の名前を覚え、その性質を知っていった。

### 『アイヌの結婚式』(1971年)

『イヨマンテ - 熊おくり』(1977年)

問合せ：民族文化映像研究所 アチック・フォーラム  
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-4 御苑ビル2 階  
TEL:03-3341-2865 FAX:03-3341-3420  
<http://www.tk.xaxon.ne.jp/~mineiken/>

## イベント・セミナーご案内

### 小菅の里知る区ロード探検隊2000

秋の探検隊は、子どもたちにふるさとの歴史文化・自然を五感で味わってもらおう企画として、オリエンテーリングを行います。

日時：10月22日(日)

場所：長野県飯山市瑞穂地区小菅

問い合わせ：瑞穂地区活性化センター

TEL：0269-65-2501

### 日本環境教育フォーラム

#### 清里ミーティング2000

自然環境を舞台に環境教育を実践する人々の集いです。テーマは、「原点を見つめよう」

日時：11月18～20日(土～月)

参加費：会員28000円、非会員33000円

#### 自然学校指導者養成講座

環境教育を進めるプロの指導者のための講座。

応募締切：10月15日

問い合わせ：(社)日本環境教育フォーラム

TEL：03-3350-6770

### Satoyama21～里山から考える21世紀

映像『今森光彦の里山物語』の上映と、講演、トーク、パネルディスカッションを通して、里山の保全と人と自然の共生を考えます。

日時：10月20日(金)～11月2日(木)

場所：東京都写真美術館ホール(恵比寿)

問い合わせ：

「里山から考える21世紀」実行委員会事務局

TEL：03-3475-7730

### 国際会議『森林の価値』

森林と持続可能な開発に関する国際会議『森林の価値』は、国内外の様々なセクターの研究者らが集い、歴史的・生態学的・経済的価値などの観点から今後を展望します。

日時：10月12・13日(木・金)

場所：国連大学本部3階国際会議場

問い合わせ：地球環境パートナーシッププラザ

「国連大学森林会議事務局」

TEL：03-3407-8107

### 牛久自然観察の森

#### 竹細工教室

地元の人と一緒に、笛・竹とんぼ・一輪挿しなどをつくります。

日時：10月14日(土)・11月11日(土)

参加費：無料

#### 植物観察会

日時：10月15日(日)・11月19日(日)

心絵日記教室

日時：10月18日(水)

#### きのこ観察会

日時：10月29日(日)

場所：茨城県牛久市 牛久自然観察の森

問い合わせ：牛久自然観察の森

TEL：0298-74-6600 FAX：0298-74-6812

## 横浜自然観察の森

### 自然案内人入門講座

自然のメッセージを受け止め、それを人に伝える自然案内の手法を学びます。

日時：11月18日・19日(土・日)

対象：2日間とも参加できる高校生以上一般

### 森づくり入門講座

間伐や落ち葉かきなどを通じて、森づくりの基本的な考え方や技術を学びます。

日時：11月25日(土)・12月2日(土)

対象：2日間とも参加できる高校生以上一般

### 森のボランティア説明会

日時：10月15日(日)

### 森を歩き、かわいいおもちゃづくり

日時：11月3日(祝)

対象：高校生以上

### クイズをしながらオリエンテーリング

日時：10月28日・29日(土・日)

場所：いずれも横浜市栄区 横浜自然観察の森

問い合わせ：横浜自然観察の森

TEL：045-894-7474

## グリーンセイバーセミナー

植物・自然環境・生態系に関する知識を身につけ、自然と調和した社会作りにも貢献する人材育成セミナーです。

### ベイシックセミナー

内容：自然・植物環境に関する手引き

日時：10月14・15日(土・日)

場所：中央大学駿河台記念館

セミナー受講料：17000円(協会会員・学生は15000円)  
ベイシックテキスト：3000円(消費税込)送料310円

### マスターセミナー

内容：自然を守るための理念とその方法

日時：11月4日・5日(土・日)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

セミナー受講料：30000円

(協会会員は28000円・学生は25000円)

マスターテキスト：3500円(消費税込)送料310円

問い合わせ：樹木・環境ネットワーク協会

TEL：03-5366-0755

## やまぼうし自然学校

### 森で語り合う会・森の作業

日時：10月15日(日)

場所：戸隠高原 ふれあいの森

### つる切りとつる細工

日時：11月12日(日)

場所：戸隠高原 ふれあいの森

### 炭焼き講座

炭焼きのプロが教えるナラノ白炭づくり。

日時：10月7・8・9日(土・日・月)

場所：長野県菅平高原・環境学習の森

### 森林整備とライブトーク

間伐ボランティア参加、加勢清志氏・玉村豊男氏らのライブトークです。

日時：10月29日(日)

場所：塩尻市チロルの森

問い合わせ：

NPO法人山ぼうし自然学校(長野県須坂市)

TEL・FAX：0268-74-2735

## 竹資源活用フォーラム公開シンポ

市民参加の竹林活用を考える～里山における竹林の現状と課題、方向性をテーマに開催されます。

日時：2000年10月14日(土)13:00～

会場：京都私学会館

(京都市下京区室町通り高辻上ル)

1. 基調講演「これからの里山とタケ」  
中川重年(神奈川県自然環境保全センター)

2. 全国各地の事例報告

(1)仲間づくり

「老若男女、竹炭・音楽から広げよう」

(2)ひとづくり

「地域への感性を育むタケ活用プログラム」

(3)まちづくり

「長岡京市における市民参加の竹林整備」

(4)もりづくり

「林業家からみた竹林活用の現状と課題」

参加費：シンポジウム 2000円、情報交換会 2000円

問い合わせ：

竹資源活用フォーラム 会長 内村悦三

TEL：0774-21-4861

京都府宇治市南陵町5-1-23 〒611-0028

## フォレスト工房もくり

ちょっと変わった秋の味覚

～いろいろな焼酎漬け

日時：10月15日(日)

場所：長野県真田町

秋の神髄 マツタケ狩りと料理

日時：10月17日(火)

場所：長野県真田町

ブナの森に浸る

～キノコ狩り&ソバグリを食べる

日時：10月18、19日(水、木)

場所：長野県飯山市なべくら高原

復活！日本の森林文化～炭窯再生作業

日時：10月28、29日(土、日)

場所：長野県真田町

問い合わせ：

フォレスト工房もくり(長野県真田町)

TEL：0268-72-9733

# すてきなカントリーサイド・里山で遊ぼう ケビン・ショートさんと一緒に遊ぶ1日・

10月22日(日) 横浜自然観察の森に来てね!

主催:(財)イオングループ環境財団・横浜自然観察の森・里地ネットワーク

ケビンさんが日本の里山に魅せられたのは13年前。千葉県のある農村にひっこしてからです。毎日のように里山の中を散歩にでかけ、見たものすべてに感動していました。日本の雑木林、田んぼ、あぜ、畑、ため池、小川、クリやナシ、ウメの林、神社やお寺の鎮守の森、そして、農家の屋敷や屋敷林などなど。数多くの小さな環境が、パッチワーク状に存在している里山は、世界でも有数のカントリーサイドだそうです。ケビンさんの目に写った里山は、魅力でいっぱいです。特に、水と林のコンビネーションが、豊かな生態系を育んでいるようです。野草や山菜、ホタルやトンボ、メジロやシラサギ、タヌキやイタチ、そして、カエルにヘビなど多彩な生き物たちがすむ魅力いっぱいの里山です。

ケビンさんの目から見た里山の話聞きながら、あなたも一緒に散歩してみませんか。きっと、あなたも里山の魅力にとりつかれるはず...!

集合:午前12時(早めに来て、お弁当を食べてから参加してくださいね)  
場所:「上郷森の家」森のホールです。電話:045-895-2211  
散策は隣接の横浜自然観察の森で行います(横浜市栄区上郷町1562-1)

12:00 横浜自然観察の森の紙芝居  
13:00 ケビン・ショートさんから里山の魅力と楽しみ方のお話  
14:00 ケビンさん、森のレンジャーさんと雑木林と里山の自然観察会  
16:00 解散

**申込み・お問合せはFAXでお願いします。折り返し参加証と地図を、お送りします。申込者多数の場合は先着順で締め切らせていただくことがあります。あらかじめご了承ください。(60~70名程度を予定しています)**

雨天の場合も、森のホールでお話を聞き、少しだけ散策を行います。

(財)イオングループ環境財団

【電話】043-212-6022

里地ネットワーク

【電話】03-3500-3559

【FAX】03-3500-3841

資料代 : 子ども無料、大人500円(「里地だより」代です)  
必須持ち物: 軍手、雨具、長靴など天候によって各自ご判断ください。

申込者代表者名: \_\_\_\_\_ 大人 \_\_\_\_\_ 人 + 子供 \_\_\_\_\_ 人 合計 \_\_\_\_\_ 人

連絡先住所 \_\_\_\_\_ 電話 / FAX \_\_\_\_\_

